

2020年度 人間学群生の学修・進路状況に関する調査

人間学群の教育改善に向けた提言（要旨）

人間学群学生専門委員会

- ・大学説明会は本学の入学動機の1つになっており、特に推薦入試による入学者に関しては、その傾向が強い。現在では約半数の学生しか説明会に参加していないため、より多くの高校生が参加できるためのしくみを工夫する必要がある。
- ・大部分の学生は熱心に授業に取り組んでいるが、一方で約4分の1の学生は学修が予定よりも遅れている。その要因は様々であるが、「オンライン授業」と回答した学生が多数おり、個別の支援が必要である。
- ・所属学類、他学類における授業満足度は全体的に高いものの、学年別にみると1年生が最も低い。教養科目が多く、学群の授業が少ないことも一因であると考えられるが、1年生の段階から専門領域のおもしろさを伝えていく必要がある。
- ・多くの学生が「授業」に期待や関心をもって入学し、計画通りに学んでいる。その反面、目的を達成した学生は約半数にとどまり、また約6割が新たな目的を見つけていない。大学生活を通して学生が新たな目標を見付け、それを達成できるように、より多彩な経験ができる場をプロデュースすることが求められる。
- ・約半数の学生が将来に何らかの不安を感じており、特に4年生は就職について不安をもつ傾向がある。2年生・3年生の段階から就職・進学を見据えて継続的にキャリア教育を実施し、以降不安を軽減することが期待される。
- ・大学の授業は、大部分の学生の進路選択に影響を与えており、特に推薦入試で入学した学生においてその傾向が強い。大学教員は学生の進路とのつながりを意識した上で、授業を実践することが求められる。
- ・学生の目指す資格や進路は学類によって大きく異なるため、人間学群としてのキャリア支援に加えて、各学類の特性に配慮した、よりきめ細かい支援が必要である。
- ・学年が進行するにつれ、資格・免許の取得を希望する学生の割合は逡減し、「大学院進学」や「教員」を目指す学生の割合も低下する。熟慮した上での進路変更は歓迎すべきことであるが、安易な資格取得の断念や企業就職への切替えを防ぐために、専門職や研究職の魅力を学生に積極的に伝えていくべきである。
- ・約半数の学生は、4年生になって最終的な進路を決定しているが、在学中の進路変更もその一因である。変更そのものは問題ないが、就職活動直前に熟慮を欠いたまま唐突に進路選択することはミスマッチングや未決定につながりかねない。低学年の段階で、様々な進路の選択肢について探索することで、リスクを回避できる。